

氏名	高橋 賢悟
ヨミガナ	タカハシ ケンゴ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第693号
学位授与年月日	令和4年3月25日
学位論文等題目	（論文）Material Maximalism（素材極限主義）による命の転写 － 生、死、そして祈りへ － （作品）Re:pray Origin as the flower funeral Second Forbiddance

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	赤沼 潔
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	片山 まび
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	谷岡 靖則
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	黒川 廣子

（論文内容の要旨）

本論は、筆者のアイデンティティ、過去作のコンセプト、技法の構築、自己の体験などを振り返りつつ整理することで見えてきた新たなテーマ、「祈り」にもとづいて制作した博士提出作品《Re:pray》について論じた。

本論は3章からなる。第I章では、自らの制作を貫く思想とその成立過程について論じた。まず筆者の故郷からアイデンティティを見直し、制作の鍵となる「自然に対する畏敬の念」について述べた。つぎに過去の自作を「生」と「死」に整理し、「生」の金属造形として津田信夫の影響を受けつつ新しい造形とした動物造形を取り上げた。いっぽう「死」の金属造形として《flower funeral シリーズ》を取り上げ、その源となった明治工芸の超絶技巧について「集合美」という概念を提唱した。これらの制作過程のなかで、生きるための普遍性を半永久的な金属に託したことへの気づきと、鑄金こそは筆者にとって「生命のための永遠なる祈り」であると意味づけた。そのうえで、ある素材にしか出せない表現を追求するために技法を創意工夫し、自己表現を行う思想として「Material Maximalism(素材極限主義)」を提唱し、近代工芸の歴史をなぞり、この思想の立ち位置を論じた。

第II章では、制作において「表現」・「技法」・「素材」の整合性を考察した。金属という「素材」、鑄金という「技法」でしか得ないことを中国の殷代の青銅器と、鈴木長吉の作品から考察した。筆者は現物鑄造法と真空加圧鑄造法という「技法」と、アルミニウムという「素材」に可能性を見出し、鑄金史上、はじめて厚さ0.1mmという超極薄鑄造物を成功させ、生花そのものを完全に金属で表現することを可能にした。そのプロセスについて論じつつ、コンセプトと技術を強くリンクさせる「表現と技術の一致」を繰り返すことで表現力が強度を増していくことを論じた。すなわち、筆者にとって鑄金のプロセスは生命への花向けと再生・転生であると位置付けた。

第III章では、博士提出作品について、コンセプトや制作過程について論じた。震災後の体験をもとに「祈る」ことが生きるために必要な行為であるとした。過去の自作において自身に芽生え始めた自然崇拝的な宗教観について、和辻哲郎の著書『風土』の記述等から原始宗教とされる自然崇拝の芽生えを芸術の域へと昇華させることを論じた。展示では過去と現在の普遍的な死生観と相対することで、未来を生きるために「祈る」ことへの原点回帰を目的とした空間構成を思案した。本展示の核となる未来については、「祈る」対象として、自然の威厳を動物の角の造形に見出し、造形化を試みた。その制作にあたってはスケール感が必要とされたが、大型品を制作することに向かない真空加圧鑄造法の限界を探ることであった。

そのため求めるサイズと薄肉でできたアルミニウム作品の素材強度、作業量の限界サイズが拮抗したサイズを計画し、かつてない規模のサイズを設定した。製作中は構成や強度、運搬時のための分割するための構造など大きさのために様々な問題が生じたが、その問題を乗り越えた経験は大きな糧となったことを論じた。以上、博士展を通じて空間制作までの展開、現物鑄造のサイズの拡大と成功率の向上、生の金属造形として簡素化した動物造形と死の金属造形として集合美による造形の融合を目指したことを論じた。

結論として、作品においては自然という壮大なテーマに挑戦したことにより、現物鑄造法と真空加圧鑄造法によって自然美と素材美の融合を果たし、自身の「祈る」対象の具現化を実現させ、さらに論文により理論的な裏付けを得ることで、ひとつの区切りを得たことを論じた。

#### (論文審査結果の要旨)

申請者は、「超絶技巧」の文脈のなかで既に高い評価を得ている鑄金作家である。提出論文では、それを乗り越えて新たに「Material Maximalism (素材極限主義)」というアイデアを打ち立てるべく論を展開している。

第Ⅰ章は、制作の根幹をなす経験やイメージ、アイデアが語られる。生い立ちにはじまり、東日本大震災によって引き起こされた死に対する強い衝撃と、それを乗り越えるための祈りというアイデアの形成過程は、やや冗長ではあるが作品の理解をうながすうえでは重要である。つぎに津田信夫や明治の超絶技巧の「集合美」からの影響を踏まえ、ある素材にしか出せない表現を追求するために技法を創意工夫し、自己表現を行う思想として「Material Maximalism (素材極限主義)」が提唱される。なおその高みに至るために、自らの制作を宗教に準えている。この新しい言葉にはさらに深い考察が求められるものの、工芸の制作行為の中に宗教性を見出そうとする考え方は柳宗悦の思想にも似て魅力的である。

第Ⅱ章は、鈴木長吉から受けた影響、減圧鑄造法についての特性、アルミ素材のメリット等が論じられる。ジュエリー用の減圧鑄造法を大きな作品へと転用していく過程や、ともするとマイナスとなる湯道や筭の造形への転化は興味深い。さらに作品の特色をなす生花の鑄造こそは生命の転写であり、祈りであることが生き生きと論じられる。本章に記された技法や素材の特性は、他の鑄金作家に対しても重要な内容となるであろう。

第Ⅲ章では、作家活動の集大成としての提出作品について論じている。読者は改めて津田信夫からの影響と超絶技巧の合体、生と死を乗り越えて祈りにたどりついたその新たな造形の意味を知ることになる。ふんだんな写真により制作プロセスが紹介されている点も好ましい。

全体としては現代工芸全般に対して新しいアイデアを提唱するという意欲的な姿勢を高く評価したい。筆が思考に追いついていない部分もなくはないが、今後、十分に乗り越えられるものであろう。以上、本論文は特に内容において斬新かつ重要なアイデアが示されていることから、審査員の同意のもと博士学位に相当するものとして意見の一致をみた。

#### (作品審査結果の要旨)

高橋賢悟氏の作品《Re:pray》は、彼の造語であるMaterial Maximalism (素材極限主義) を裏付ける形で制作している。彼の素材極限主義に対する論説は未だ曖昧だが、彼がこれまでに素材と向き合ってきた中で、それに依って培った形体には眼を見張るものがある。工芸表現の進化としての鑄金作品であると言えるであろう。

彼が使う鑄造技法は元来歯科業界で使われている技法であり、その方案自体に取り立てて新しさはないが、雌型を利用することで薄さを上手く使い、それを造形へと試みることで作品が成り立つ制作方法は実に工芸的で緻密な世界と言える。また、論文で述べているアート性に関して、有名なものから受けた影響

が大きくそれを体良く結び付けている結果であり、彼が言う程には私はこの作品にアート性を感じてはいないが、工芸とアートの違いに何があるのか、求めるものは何なのかを考えることへの一つの提言であり、これからの発展した議論が成されることを期待するところである。

展示に関して、作家本人は時間軸で過去・現在・未来を表現しているとは言うが、これも曖昧でその時間軸で何を表現しているのか空間として視えてこないものと成っており、単なる舞台装置にしかみえない。おそらく鹿のオブジェとして単体の中で時間軸の表現を試みるべきかと私には思えた。それは彼の造形と素材に対する想いが鹿にパワーとして現れているので、造形の中で時間軸の可能性を考察することが彼の持つ技法と彼が思う自然界の驚異を表現できるのではないかとこれからを期待する。

総論としては、工芸の持つ素材の魅力を十分に発揮した中で、現代の造形を成している作品ではある。他からの提言を借りずに彼個人のコンセプトのオリジナリティーが何であるかが明確になれば、より一層期待の持てる作品であるのは確かである。

博士課程の作品として十分に評価できることから、審査員の同意のもと博士学位に相当するものとして意見の一致をみた。

#### (総合審査結果の要旨)

申請者は、審査論文「Material Maximalism (素材極限主義) による命の転写 (生、死、そして祈りへ)」の中で自身の体験や鋳金の技法を基底とし、そこから鋳金作品を通して生と死を意識し論じている。また、Material Maximalism (素材極限主義) という工芸感を見出し、鋳造技法の極限を見極める努力や研究を続け、新しい境地に達して他に例を見ない作品制作に辿り着いた実践内容をまとめている。作品内容の詳細な記述は高度な内容を多く含み技法的資料としても貴重なものである。また、鋳造という行為を通して、自信を高め試行錯誤しながらも目的を達成している内容に説得力がある。この中で申請者は、過去の人の普遍的な死生観と対峙することで未来に生きるために「祈る」ことへの原点を模索し、鋳造を通してその素材、制作技法の特殊性と可能性で独自の領域に踏み込んでいることが高く評価できる。

申請者は、修了制作において、減圧鋳造法による細密鋳造作品を提出し、その後細密作品の制作を助手、講師時代に継続し、そして博士後期課程に進み、博士審査作品展においては、4点からの構成となる、アルミニウムによる超細密鋳造作品を提出した。ここまでに至るきっかけとなったのは、自身の過去の経験を機軸としながらも、真空加圧鋳造の技法の獲得が大きかった。

総合的には、多少の斑はあったが、概ね順調に審査論文は展開され、自身の作品制作の根底にある考えに辿り着いた感がある。制作面においては、最終的に4点の展示となったが、それぞれの作品のクオリティは非常に高く、他を圧するものがあった。本人は空間をまとめることは不得意としながらも、それぞれの関係性や、素材のあり方、コンセプト等に説得力があり、高いレベルを維持していた。このように鋳金技法の高度な展開や、積極的に表現効果を高めようとした姿勢は評価されるものであり、全審査員から博士学位を認める条件を満たしていると判断された。